

健康文化

Freedom Trail to the Nursing (1)

渡邊 順子

◆Prologue

ボストンにある州会議事堂で、アメリカがイギリスから独立することを宣言したのは1776年の7月でした。奇しくも今年の7月、米国ボストンに私は文部科学省在外研究員として辿り着きました。かつて、新天地を目指して大西洋を渡ってきた移民たちとは逆方向から、太平洋を経てアメリカ大陸を横断して辿り着いたのです。

成田から乗ったJALの遅れでシカゴで乗り換えるはずのユナイテッドに乗り損ね、シカゴから乗り換えたAA (American Airline) もなかなか飛び立とうとせず、結局、ボストンローガン空港に辿り着いたのは名古屋空港を出発して20時間後でした。飛行機の遅れを昨年のテロや爆弾騒ぎのせいにはしたくありません。どこの空港も通勤ラッシュのような混雑ぶりで飛行機もすべて満席、でも、平和でした。シカゴでの入国審査はスムーズでしたが、シカゴから国内線に乗り換えるときに、機内持ち込み用荷物にアラームが鳴り、厳しいボディチェックを受けました。女性の担当官が「靴を脱いでください」と丁寧に言うので、片方の靴を脱いだら、「両方とも脱いで」と厳しい顔で言われ、脱いだ靴で床や靴底どうしをパンパンたたき納得した様子を見て、「アメリカに来たんだ」と実感しました。アラームを鳴らせたのは、2台のパソコンとビデオカメラとデジカメたちでした。ボーナスで買ったばかりのVAIOと愛しいiBookを無造作に扱われて、少々ムツとしながらも、これから始まるほんのプロローグに過ぎないと気持ちを落ち着かせました。

まだ住むところも決まっておらず、かといっていつまでもホテルにはいられないと、ボストンに着いて2日後に、不動産屋へ行きアパートを見つけました。その日の内に、電話を契約し、銀行口座を開けました。ボストンの右や左はもちろん東西南北すら、全くわかりません。いま私が立っている場所さえうまく説明できません。冗談ではなく、私はボストンには「ボストン」という駅が存在すると信じていましたから。

マサチューセッツ州ボストン市。歴史と芸術とそして、学問の街。観光ガイ

ドブックに載っている浅い知識はあるものの、私にはまだそれらは<点>として、存在しているにすぎません。これからこの街で暮らしていくためには、点と点を結んで線にし、そしてさらに平面から立体的なものへと作り上げていく過程が不可欠です。これは、看護学がめざしていることと似ています。

ひとり暮らしは気楽ですが、仕事や生活全般について白紙状態から物事を進めていくのは予想外に骨が折れそうです。ゼロからの出発は希望だけが支えです。きっと、かつての移民たちとおなじ心境でしょう。

さて、これから始まる私の看護学への **Freedom Trail** は、いったい何が待ちかまえているのでしょうか。

突き上げてくる不安を期待で押さえつけて、いまボストンの扉を開けました。

◆Freedom Trail

抑圧されたイギリス植民地時代にアメリカの建国に向けて先達が巡った足跡：“Freedom Trail（自由への足跡）”を辿ることは、ボストンで生活するための礼儀であると思っていました。

「ボストン・コモンからチャールズタウンまでの全長 2.4km、徒歩で3時間の行程」と書かれたガイドブックを、気楽に考えたのが間違いでした。ボストンの地形は、一見平坦のように見えます。しかし、日本の古都<京都>と姉妹都市であるように、こぢんまりとしています。やや起伏に富んだ街並みになっているのです。また、ニューイングランド地方と呼ばれているように、歩道はレンガ敷きが多く、歩き慣れないととても歩きにくいものです。多くの観光客が **Freedom Trail** のもっとも賑やかなポイント“クインシーマーケット”で挫折する気持ちがよくわかりました。

この季節は日本でいうなら、ちょうど年度末にあたるのでしょうか。チャールズタウン橋付近の大改修工事が、地上に書かれた赤い“Freedom Trail”のラインをところどころ消してしまい、行く道を何度見失ったかわかりません。

折り返しの最終ポイントである“バンカー・ヒル記念塔”に辿り着いたときは、まるでエベレストを征服したような気持ちになっていました。ところが、この高さ 67m の“バンカー・ヒル記念塔”の中にある 294 の石段が難関でした。たしかに、入り口には「心臓の弱い人、小さな子どもは危険」と書いてありました。中は薄暗く、人が一人やっと通れる回旋状になった石段を登って行くのは容易ではありませんでした。

四方に小さな覗き窓があるほんの1畳くらいの展望台から見た風景は、ちょうど故郷の犬山城の天守閣からの眺めととてもよく似ていて驚きました。戦い

の後で勝ち得た平和が霞んで見えました。

◆BURNS Library

今回の研修拠点となるボストンカレッジ (BC) は、1863年にイエズス会によって創立された男女共学の総合大学です。カレッジというと単科大学をイメージしますが、伝統的な総合大学です。ボストン大学 (University) がすでにあつたため、改名をあえてしなかつと言われていました。専攻は法学、化学、教育、芸術、心理学、看護学など多岐に渡り、スポーツではアメリカンフットボール (イーグルス) が有名です。

また、ボストンカレッジは設立当時は、ボストン市にありましたが、1913年にボストンより西方の Newton 市 Chestnut Hill に移転しました。およそ 75ヘクタールある広大なキャンパスの中に 92 の建物が点在しています。



BURNS Library

私が最初に指導教授 Dr.Dorothy A. Jones と BC で会ったとき、BC で最も大きな規模を誇る O' Neil (オニール) 図書館を案内されました。どこでも図書館は夏休み中もとても活気のあるところだからでしょう。そこで、看護学専門の司書を紹介されました。驚いたことにその司書の方はオフィスを持っており、翌日、看護学に関する文献情報について、さらに詳しく案内していただきました。

Dr.Dorothy A. Jones からは、「BCにはまだ他にいくつか図書館があり、中でも、BURNS (バーンズ) Library は、NANDA(North American Nursing Diagnosis Asociation : 北米看護診断協会)設立準備からのおよそ30年間の資料がすべて保存されている。」と聞き、後日、ひとりで行ってみることにしました。Dr. Dorothy A. Jones は前 NANDA 理事長でもあったためか、その図書館のことを誇らしげに話してくれたのです。

BURNS 図書館は、さきの開放的な O'Neil 図書館とは全く違い、古城のような重い扉に閉ざされた建物でした。その重い扉をカ一杯引いて中にはいると、石畳のアプローチを数段上がったところにまた重い扉があり、それを開けて中に入ると、薄暗い部屋の中に女性警備員がひとり机のスタンド照明を頼りに座っていました。軽く挨拶をして、そのまま中にあるであろう閲覧室へ行こうとしたら、「Excuse me !」と大きな響き渡る声で呼び止められてしまいました。

彼女は、「ここはどういう図書館か知っているか？あなたが探しているものがここにあることは確かか？無断では入れない。IDは持っているか？」と、畳み込むように質問してきました。それで、Dr.Dorothy A. Jones から NANDA の資料はここにしかないと聞いてきたこと、まだ日本から着いたばかりで ID は持っていない、と説明したら、廊下の突き当たりの部屋に人がいるから、そこで登録しなさい、ただし、荷物は全てすぐ横の小部屋に置き、ペンも置いていくようにと厳しい顔で言われてしまいました。

しかたなく、どうみても掃除道具置き場にしか見えない部屋の片隅に、パスポートや帰りの飛行機のチケットまでの全財産を入れたバッグとパソコンを置いて、丸腰で次なる部屋へと進みました。

その部屋は、あたかも誰かの書斎であったかのような広さで、床から天井まで三方の壁一面に本があり、閲覧用と思われる大きな机が6つ並んでいました。入り口には、頑丈な木製のカウンターの上に、建物には似つかわしくないコンピュータのモニターが3台ありました。部屋にはいるとすぐに司書らしき男性から呼びかけられ、登録するためにはパスポートとビザが必要と言われ、再び例の掃除道具置き場へ戻りました。そして、NANDA の文献が見たいことを告げると、コンピュータで検索し「地下の書庫に書類と本が入っている箱が11箱ある。全部見たいか？」と言われ、「箱？」と不思議に思いながら「書類の箱が見たい。」とお願いしました。

しばらくすると、彼は厚い絨毯敷きの床を恨めしそうに、6つの箱を乗せたカートを引きずるように持ってきてくれました。ひとつの箱の重さは軽く20kgは越すでしょう。「きっとこの箱の黒いファイルが一番古い書類だと思う。」

と彼は最上段の箱のふたを開けて教えてくれました。

しかし、箱の中味は、想像を絶するものばかりでした。今までの図書館のイメージが一瞬のうちに塗り替えられた気がしました。私が思い描いていたのは、NANDA 設立に関する議事記録がファイルしてあるのだろう。つまり、公開することを前提とした書類が保管してあるものと勝手に思い込んでいたからです。

目の前に積み上げられた箱の中味は、1970年代初頭に St.Louis で NANDA 設立に奔走した Kristine Gebbie と Mary Ann Lavin がアメリカ全州の同志へ宛てた手紙や、頻回に会議をしたことを物語るおびたしい領収書の束と、袋に詰められたスナップ写真など、まるで、誰かの宝箱を間違っ て開けてしまったような気持ちになりました。

それから数日間は、とにかくひたすら丁寧に書類を調べていきました。しかし、メモが許されないのはつらいので、なんとか交渉してパソコンとデジタルカメラの使用を許可してもらいました。何日間か通ううちに、警備員とも顔なじみとなり、今では鍵付きのロッカーを貸してくれるようになり、司書の方も、パソコンの電源が取れるよう窓際に私専用の机を運んでくれたりと親切に感謝しています。

しかし、まだまだ NANDA BOX を制覇するには相当の時間がかかります。先日、やっと“ORANGE BOOK”を見つけたばかりです。

NANDA の Trail を辿るのも、なかなか険しいものになりそうです。



Simulation Lab. の授業風景(1)

◆Nursing Simulation Laboratory

BCの新学期は、9月3日（火）から始まりました。なぜ、月曜日から始まらないんだろうと単純に思っていたら、9月の第一月曜日は“Labor Day：労働者の日”（日本でいうメーデー5月1日と同じ）のため、祭日となり学校・会社・銀行はお休みでした。そうとは知らず、「また、月曜日に来るから」と約束したBURNS図書館が閉まっていたことも納得できました。

さて、今回、BCに期待していたもののひとつに“Nursing Simulation Laboratory”を使った授業があります。基礎看護教育における学内実習をどのように組み立てているのか、その全貌をつかめたらと考えていました。特に、私の研究テーマであるに関する教育内容には興味があったため、可能な限り“Nursing Simulation Laboratory”の授業に参加したいと、Dr.Dorothy A. Jonesに依頼し、9月4日（水）の“Faculty Meeting：教官会議”で調整することになりました。

最初に参加した授業は、月曜日と水曜日に2グループが分かれて行う“Clinical Practice in Nursing Science I”でした。この授業は学部生ではなく大学院生を対象としたもので、授業内容は、Positioning：安楽な姿勢・体位変換、車椅子・ストレッチャーへの移動介助、関節可動域訓練、松葉杖、そして、身体拘束（抑制）などでした。まず、事前に予告された内容の10分程度の小テストをやり、次にこれも予め指示された4本のVTR内容とそれに関する補足説明をしたあと、身体拘束（抑制）に関する某企業が製作したVTRを視聴しました。そして、2?3人で1台のベッドを使い、今日の内容についてそれぞれ違ったことを実習し始めました。学生15名に対して教員は2名です。教員は1グループ目のときは助教授1名、助手1名でしたが、後日、2グループ目のときは同じ助手1名とTA(大学院博士課程)1名で実施していました。

“Nursing Simulation Laboratory”の広さは、部屋の半分を6台のベッドが占め、残りの半分は片袖テーブルの付いた椅子が20脚並んでいました。それぞれのベッドにはTVモニターが天井から設置してあり、別に、教官室が2つと器材倉庫がありました。まだ、ラボの詳しい使用計画はわかりませんが、成人・小児・母性・地域といった各領域の学年を縦断的に効率よく共用していることを、“Nursing Simulation Laboratory”の主担当者である、Dr. Robin Y. Woodから説明を受けました。



Simulation Lab. の授業風景(2)

授業後の感想として、学生数と教員数の割合が日本で教えている私の場合とあまりにも差がありすぎることを説明すると、「学内実習で教員1人が教えられる学生数は8人が限界でしょう。ですから、この部屋には20人以上入ることはありません。」と言われ、技術教育の奥深さに納得しました。

翌朝8時から1時までの Dr. Robin Y. Wood が担当した大学院生の“Nursing Simulation Laboratory”の授業で、スケルトンと自分の体を使って呼吸器の解剖生理学を徹底的に教えていたのが印象的でした。そして、“Nursing Simulation Laboratory”の授業に必要な理論(Theory)が集約されたオリジナルテキストとは別に、実技試験の内容までを含めた実習(Practice)オリジナルテキストが豊富に作成してあったことは、BCを代表とする看護理論家 Sister Callista Roy や Majory Godon らの底力の強さの現れではないかと感じました。

理論と実践の絶妙なバランスのよさに、ビデオカメラを持ち続けた腕のしびれも忘れていました。

(名古屋大学医学部保健学科助教授・看護学専攻)